児童の発言を受け止め，広げ，深める問い返し

—児童が主体的に学びに向かう授業を目指して—

高度学校教育実践専攻
教員養成特別コース　　実習責任教員　金森　三枝
喜馬　陽介　　実習指導教員　藤原　伸彦

キーワード：発問 問い返し 主体的　多様な考えを引き出す

Ⅰ．課題設定の理由

大学院で基礎から学び，授業について考えるなかで，筆者は児童が主体的に学びに向かうことこそが大切なことであると考えるようになった。筆者が目指す授業とは，児童一人一人が主体的に学びに向かう授業である。「主体的に学びに向かう」とは，授業の中で児童の発言や反応が主となり進行していく，教師と児童が共に作り上げていく授業であると考えている。

問い返しにより，掘り下げる，ゆさぶる，関連付けることで児童の発言の機会を増やせるようにし，教師と児童が共に作り上げる授業を目指して取り組みたい。児童のつぶやきや発言を大切にして授業づくりを進めていきたいと考え，本研究主題を設定した。

Ⅱ．授業実践について

⑴ 主免実習における実践と省察

主免実習では，第 3 学年において，算数科「あまりのあるわり算」の授業実践を行った。主免教育実習では，緊張感などが出てしまい，思った通りに授業を進めることができなかった。授業の流れに添ったワークシートを用意し，細案を作り授業を実践したが，何をやればいいか分からず，ワークシートが真っ白のまま授業を終える児童もいた。

プロトコル分析からみえた課題としては，教師の発問，指示が明確にするという点と児童に目線を合わせることを意識する点である。初めての評価授業で平常心を保つことは困難であったが，何よりも児童とのかかわりを大切にした授業を行っていきたいと考えるようになった。

⑵ 基礎インターンシップにおける実践と省察

附属小学校第 4 学年において，算数科「がい数とその計算」の授業実践を行った。本単元では，「何のために概数にするのか」をつかませることから指導し，その概数の表し方の理解を図った。「指示を明確にする」「児童と目線を合わせる」という課題をしっかり意識して取り組んだ。しかし，児童の発言に価値をもたせることが疎かであったといえる。まとめの段階においても教師の言葉が多かった。児童との対話を繰り返し，児童から考えを引き出しながらまとめに導くべきあったと考える。

大学での「教職協働力実践演習 B」の授業においても，基礎インターンシップを振り返ることができた。児童の考えを大切にするために，「数直線をすぐに提示しないこと」やまとめの「切り捨て，切り上げ」「四捨五入」という言葉を，練り上げの段階で児童から引き出すことが改善策として挙げられ，模擬授業を行った。

基礎インターンシップを終えた筆者の課題は以下の 3 つにあげられる。

１つ目は，児童の発言を生かす問い返しである。積極的に「それってどういうこと？」というような問い返しを増やす。そうすることで児童の考えを引き出すことにもつながると考えられる。教師が子どもの発言をつかみ，受け止めて返すことをしっかりと意識して，対話によって，子どもの思考が深まるようにしていきたい。

２つ目は，児童が学び合う場の工夫である。児童が主体となるような授業を展開していくために，児童がおもしろいと感じ，興味・関心を高めることができるような教材提示や導入の工夫をする。また，児童が話したくなるような発問や応答により，児童が問いや考えを伝え合う場面を増やす。授業が児童の考えや発言を中心として進むものとなるようにしていきたい。教師が一方的にまとめるのではなく，児童の言葉や考えがまとめにつながるような授業展開にしていきたい。

３つ目は教材研究をもとにした授業設計である。授業計画の段階からタイムマネジメントも重視して，具体的に授業のイメージを持てるように考えていきたい。具体的な細案を作成し，児童の発言を予想したうえで，予想外の発言に対しても動揺することなく，それを広げ，深められるような対応力を鍛えたい。

(3) 総合インターンシップⅠにおける実践と省察

第６学年において，国語科「筆者の主張や意図をとらえ，自分の考えを発表しよう」の授業実践を行った。本時では単元の導入として『笑うから楽しい』を読み，文章に慣れ親しみ，『心の時間と時計の時間』に繋げていく。導入部分では，楽しかったことを児童が発表し，そこから『笑うから楽しい』の題名の違和感を見つける。なぜ，筆者がそのような題名に設定したのか，筆者の主張，意図はどこにあるのかという部分を確かめながら，本時の学習を進めていった。

成果としては，「児童の発言への問い返し」と児童の発言をもとにして授業を進めることができたことが挙げられる。授業の中で「どうしてそう思ったの」等の掘り下げる問い返しを増やすことができた。また，児童の発言を聞きっぱなしにしないように意識して，受け止め，支持するように心がけた。基礎インターンシップの授業実践では，児童の発言に対して「なるほど」と返すだけで，それ以上触れることがほとんどなかった。しかし，今回の授業では，児童の発言に対する反応をした上で，児童の発言をもとにして授業を進めることができた場面が増えた。

課題としては，依然として，教師の説明が多くなることである。発言の時にどうしても内容がまとめられず，遠回しになる。内容を分かりやすく，簡潔に話すことを目指したい。

また，授業の中で想定していない答えが児童から出てきた場面にうまく対応できなかった。想定していない答えに対して，以前より動揺することは減ったものの，その発言をいかして掘り下げる問い返しなどをしていきたい。

総合インターンシップⅠの成果と課題を踏まえて，総合インターンシップⅡでは次の事に取り組みたいと考える。

まず，分かりやすく発言することである。誰が聞いても分かりやすいように，短く簡潔に話すようにしたい。

次に，教師が児童の発言を引き出せるよう

に工夫することである。そのなかで，自信をもてなかったり，恥ずかしい気持ちがあったりする児童も発表ができるように，支援していきたい。児童のつまずきなどを大切にしつつ，ねらいにせまる進行をしたい。

さらに，予想外の発言にも対応できるように教材研究を深め，動揺することなく問い返すことができるようにしていきたい。児童の予想外の発言をいかすことも，主体的に学びに向かう授業を目指すうえで重要であると考える。

⑷ 総合インターンシップⅡにおける実践と省察

総合インターンシップⅡでは算数科「図形の拡大と縮小」,「およその形と大きさ」の授業実践を行った。

１）授業実践　算数科「図形の拡大と縮小」

この単元では，図形を観察する活動を通して拡大・縮小の意味を理解することを目標としている。拡大図・縮図の性質や作図の仕方を考えたり，縮図を用いて距離を調べたりすることを通して，平面図形についての理解を深めるとともに，生活や学習に活用しようとすることができる姿を目指した。

黒板に作図をする場面では，児童は苦手意識を感じているらしく,極端に挙手が少なかった。そこで，児童の実態に合わせて，発表の形態を変えた。作図ではなく，口頭での発表に切り替えたことで，児童が考えを表現することにつながった。

課題としては，既習事項に時間をかけすぎたことと，児童から多様な考えを引き出すことができなかったことである。改めて，児童の実態把握が大切であることを学んだ。

多様な意見を引き出すためには，机間指導で誰がどんな考え方をしているのかを見取る必要がある。その際，発表につなげられるように，児童に声をかけたり，個別に問いかけたりしながら，考えを引き出すことも大切だといえる。黒板に作図するとなると，説明等も難しいものになってしまう。児童の作図を実物投影機を用いて画面にうつすなど，様々な機器の活用も積極的に取り入れ，多様な考えを引き出せるようにしたい。

２）授業実践　算数科「およその形と大きさ」

この単元では，目標としてものの概形のとらえを理解し，そのおよその面積や体積の求め方を考えたり説明したりすることを通して，ものの形の見方，考え方を深めるとともに，生活や学習に活用しようとすることができる姿を目指した。

この授業実践の成果としては,導入において,児童の興味を惹き，児童の話合い活動が活発になったことと児童の疑問やつぶやきを全体に共有できたことが挙げられる。基礎インターンシップから目指していた児童の言葉でまとめができた。ここで,児童の考えをさらに問い返すことで，より深く掘り下げ，かつ分かりやすくすることができたのではないかと考える。

授業において，児童の発言を拾うことを意識していたため，児童の疑問や戸惑いを拾うことができた。一人の児童の疑問を全体に広げ,確認することで，ある程度理解を促すことができたのではないかと考える。

本授業実践では，児童の実態を把握するために事前にプレテストを行った。円の公式は数名が間違えていたため，授業中，どこかで

確認する必要があると考えていた。復習も兼ねて発問をしたところ，円の公式をつぶやいた児童がいた。そのつぶやきを拾い上げ，全体に共有することができたのは成果の一つと考える。

課題としては，児童の柔軟な考えを無視し，1つの方法に限定させてしまったことである。筆者は，東京ドームを円として計算するように考えていた。しかし，児童からは，「正方形とみて考える」という意見も出ていた。正方形と思う児童はその方法で計算させるべきであった。その後で「どちらが実際の面積に近いと思う？」などの発問をすれば，多様な考えが引き出すことができ，比べたり，よさに気付いたりするなど，児童にとっても良い学びに繋がったのではないかと考える。

筆者は，この授業において，考えた細案通りの求め方に集中させてしまった。違うやり方を授業の中で取り上げるべきであったと感じる。教科書，細案通りの基本図形としてみることばかりに着目してしまい，児童の柔軟な考えを無視することとなってしまった。柔軟な考えを全体に共有しつつ，問題解決に取り組み，児童の学びを深いものにしていきたい。そのために，「どうしてその図形だと考えたのかな？」「長方形と台形，どちらが本当の大きさに近いと思う？」といった問い返しや発問をすることが大切であったと考える。

筆者の細案通りに授業を進めてしまい，児童から柔軟な考えがでてきていたのに，生かすことができなかった。児童の多様な考えに対して教師側である筆者も柔軟な対応ができるように努めていきたい。

3）総合インターンシップを終えて

総合インターンシップは，授業実践の回数は少なめであったが，考える時間を多く取ることができた。それでも，なかなか思う通りに授業を進めることは難しく，改めて授業実践の難しさを痛感した。主免教育実習や，基礎インターンシップ時に比べて，筆者が戸惑い，授業の進行が滞ってしまうことは少なくなってきた。また，つぶやきや発言を大切にすることもできるようになってきたといえる。しかし，児童の多様な考えをいかすことなど，まだまだ十分でない部分がある。中でも特に，想定外の事態に対して，臨機応変に対応する力はまだまだであると考える。授業実践において，自分が細案で考えた通りに授業が進むことはなかった。ただ，授業は，児童の柔軟な考えによって，どんどん変化していくものであることを，総合インターンシップでは改めて考えさせられた。

Ⅲ．今後の展望

大学院に入学してから初めて教職について学ぶ筆者にとって，大学院の学びは新鮮なものばかりであった。

長い間，筆者の一番の課題は授業実践力であると考えていた。3つの学校での実習を経て，筆者の中で少しずつではあるが，授業づくりの基礎が身に付いてきたのではないかと感じる。大学院で学び，教育現場で実践するという，理論と実践の繰り返しができたということは，本当に恵まれていたと感じる。

児童が主体的に学びに向かうためにも，授業の中での問い返しは欠かせないだろう。今後も，授業実践と省察を繰り返すことで，授業実践力を高めていきたい。学び続ける教師の姿勢を崩さず，努力していきたい。